詳しく知ろう！

新しい知多半島の医療情報

半田市 知多半島総合医療センター

&

常滑市 知多半島りんくう病院

２病院による切れ目のない医療体制の構築へ

地方独立行政法人
知多半島総合医療機構

2025年4月、
知多半島の医療のかたちが変わります

半田市立半田病院から『知多半島総合医療センター』へ、
常滑市民病院から『知多半島りんくう病院』へ。

そして、二つの病院は経営統合して一つの組織に。
それが、『地方独立行政法人知多半島総合医療機構』です。

私たちは、同じ組織に属する病院として互いに強固に連携し、
高度急性期から回復期・在宅復帰まで、切れ目のない医療を提供します。

『知多半島総合医療センター』は、
災害拠点病院としてあらゆる有事を想定し、新しい場所へ移転。
24時間体制の救命救急センターを核とした高度急性期医療を中心に、
がん治療や先進の設備を活用した高度医療を提供します。

『知多半島りんくう病院』は、
住み慣れた地域で最後まで暮らし続けられるよう、
回復期リハビリや、退院後の在宅復帰を支援する医療を提供。
平日日中の救急医療や日常診療も行います。

「私たちは、地域医療の中核を担い、知多半島の人々の健康を支え続けます」
この基本理念のもと、地域に貢献し
知多半島の未来を開きます。

地方独立行政法人
知多半島総合医療機構の理念

私たちは、地域医療の中核を担い、知多半島の人々の健康を支え続けます

「一つの病院」の意識のもと新体制で地域のニーズに応える

私たち『地方独立行政法人知多半島総合医療機構』は、『知多半島総合医療センター』（旧・半田市立半田病院）と『知多半島りんくう病院』（旧・常滑市民病院）が経営統合して生まれました。同じ法人に属する「一つの病院」という意識のもと、知多半島における高度急性期から急性期、回復期、在宅復帰支援までを一貫して担います。

両院連携による診療機能の拡充は、患者さんはもちろん職員にとってもより良い環境につながります。人材不足が課題になる中、働く場の選択肢が増えることは医療機関として強みになるでしょう。一方で、機構に属する全員の意識をそろえる難しさもあるため、院内向けの説明会を実施したほか、専門的な医療を同じ基準で提供するための教育センターも立ち上げました。また、知識や技術が向上してもコミュニケーションが足りなければ良い医療はできないと思いますので、職員にはコミュニケーションに気を配ることも大切にしてほしいですね。

当機構の基本理念は「私たちは、地域医療の中核を担い、知多半島の人々の健康を支え続けます」です。私はこの理念が非常に重要だと考えています。というのも新たに何かを決めるときには、この理念に照らし、地域に必要であればやるという判断をすることが大事だからです。変化の時代ですから地域のニーズもどんどん変わっていくでしょう。そんな中でも私たちは「一つの病院」として、地域医療に貢献し続けていきたいと思っています。

知多半島総合医療機構
渡邉 和彦理事長

1991年名古屋大学医学部卒業。同大学医学部脳神経外科研究員、岡崎市民病院脳神経外科医長などを経て、2000年に半田市立半田病院脳神経外科医長として赴任し、2021年からは同院院長を務める。2025年4月より知多半島総合医療機構理事長に就任。

2病院による切れ 目のない医療体制

知多半島りんくう病院の担う回復期 （詳しくはP10へ）

地域包括ケアでの在宅復帰支援

地域の医療機関や訪問看護ステーションとも連携しながら、急性期が過ぎた入院患者のスムーズな在宅復帰をサポート。

回復期リハビリ

医師や理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などによる多職種のチームが密接に連携し、365日体制で専門的なリハビリを行う。

急性期医療

平日日中の救急医療や各診療科における外来・入院診療を提供。地域における高次医療の入り口として、日常診療を担う。

知多半島総合医療センターの担う高度急性期 （詳しくはP6へ）

高度急性期医療

脳卒中センターやNICU（新生児集中治療室）をはじめ、脳卒中や心臓病などの専門施設も備え、高度な医療を提供。

がん治療

先進機器を活用したロボット手術や放射線治療をはじめ、専門的ながん治療で「地域がん診療連携拠点病院」の役割を果たす。

救命救急

三次救急医療機関として、重篤な救急患者を24時間体制の救命救急センターで受け入れ、専門治療に迅速につなげる。

知多半島総合医療センター

院長メッセージ

救急医療や先進の治療を広く担う知多半島医療圏の高度急性期病院

半田ぴよログスポーツパーク（半田運動公園）の東側の場所で開院した『知多半島総合医療センター』（旧・半田市立半田病院）。三次救急医療機関として高度急性期医療を担い、先進のがん治療や高度医療も提供します。

知多半島総合医療センター
岡田 禎人院長

1990年名古屋大学医学部卒業。桐生厚生総合病院外科に勤めた後、同大学医学部第一外科、同大学大学院、常滑市民病院外科、安城更生病院外科などを経て、半田市立半田病院へ。2012年外科統括部長、2014年副医務局長を歴任し、2017年からは同院の副院長を務める。2025年4月より現職。

患者さんの受診負担を軽減できるよう、広々とした受付スペースと待合室を設けました

当院は長年、医療を通じて地域社会に貢献していくことを理念としてきました。新体制でも『知多半島りんくう病院』と「一つの病院」として連携しながら、知多半島医療圏の高度急性期医療を担います。建物を新設したことで、関連する診療科を同じフロアに配置するなど、「病院がこうなったらいいな」と感じていた点を反映できました。先進機器も増やし、CT、MRIともに1台追加し、それぞれ合計3台に。救急医療やがん治療、高度医療に活用します。また、患者さんが転落などでベッドの上から離れた場合、スタッフに知らせる離床センサーをすべてのベッドに採用し、危険リスクの回避を図ります。このように、医療安全を重視する姿勢も当院の特徴です。テクノロジーの力を使えば、看護師も専門業務に集中しやすくなるでしょう。

機構全体で約700床もの規模になるメリットも生かし、より良い治療を提供したいと思っています。地域の方にはご期待いただければ幸いです。

救急医療体制

地域における救急医療の要 三次救急医療機関として設備を拡充

『知多半島りんくう病院』との機能分担をする中で、一番大きな役割となるのが、三次救急医療機関として救急医療に注力すること。医療人口約60万人の知多半島において、「救急医療の最後の砦」を担い、地域の命を守ります。

1救命救急センターでは、搬送受け入れ後、迅速な対応ができるよう設備を増強しました　2屋上には大型ヘリポートを設置し、ドクターヘリによる緊急搬送体制も充実しました

「救命救急センター」を中心に、三次救急医療機関としての責務を果たす当院。経営統合後は、より広域の救急医療を担っていけるように体制が一層強化されました。

もともと年々増加していた救急車の受け入れ台数は、病院移転後はさらに増加し、年間1万1000台程度になることが予想されます。半田市・常滑市はもちろん半島全域からの搬送を念頭に、近くを走る知多横断道路には、行政の協力のもとで救急車専用出口が設けられました。また、知多横断道路も病院に近接しており、以前のように線路を2つ越える必要もなくなりました。病院の屋上には新たにヘリポートも備え、ドクターヘリの直接降下が可能に。ヘリポートと、救命救急センター、手術センターをつなぐ、救急専用エレベーターも設置しました。

搬送規模の拡大を見据え、院内にもさまざまな工夫を凝らしています。搬送直後から迅速に対応できるように、初療室や診察室の数を増設したのもその一環です。脳梗塞などが疑われる方にはできるだけ早く検査できるよう、CTやMRIといった検査設備は救命救急センターの隣に配置しました。一刻も早い対応が求められる救急患者さんを24時間体制で受け入れ、各科での早期治療につなげています。さらに、救命救急センターではドクターカーも運用しており、院内だけでなく現場や車内でも迅速に医療を提供できる体制を構築しています。

地域の基幹病院として、これまで救急患者さんをできるだけ断らないことをめざしてきましたが、移転後もその姿勢を追求し、「救急医療の最後の砦」として地域医療を守っていきます。

TOPICS

循環器系の診療科が密に連携 一貫して高度医療を行う新体制に

救急医療を強化する一環として、心臓病センターを新設。診療科ごとに切り分けず、循環器内科、心臓外科、血管外科が密接に連携して、検査から診断、治療、心臓リハビリまで一貫して診られるようになりました。先鋭の血管造影装置も1台増設し全3台になり、カテーテルを用いた血管治療も提供しやすい体制に。さらに、今後は心臓外科の手術にも力を入れていく予定です。

循環器系の治療に迅速に対応できるよう体制・設備を強化しました

がん治療

先進の放射線治療やロボット手術で低侵襲のがん治療を追求

がんの三大治療といわれる、手術・放射線治療・薬物療法（抗がん剤治療）を中心に、専門性の高い医療を提供してきました。「地域がん診療連携拠点病院」として、知多半島医療圏のがん治療をけん引しています。

薬物療法も含め、患者さんに合わせた最適な治療を行います

当院では、地域におけるがん診療の連携拠点病院としての役割を果たし、患者さんが安心して治療に取り組めるように力を注いできました。移転とともにさらに治療体制を強化しており、特に大きく変わったのが放射線治療です。強度変調放射線治療（ＩＭＲＴ）を行える先進機器を新たにそろえ、従来の放射線治療と比べてより高度な治療が提供できるようになりました。また、抗がん剤治療を受けるための薬物療法室も、以前の約1・5倍となる34床に拡充。患者さんに落ち着いて治療に臨んでいただける環境です。

手術では以前より低侵襲の治療を追求し、胃がんや大腸がんでは腹腔鏡下手術を積極的に行ってきました。令和2年からは新型機器によるロボット手術を行っており、当初から取り組んでいる前立腺がんに加え、近年は直腸がんでの手術症例も集積してきました。今後は胃がんをはじめ、ロボット手術の実績を伸ばしていくほか、他のがんにも適応を広げていく予定です。

高度医療

集中治療のための体制が充実 緊急を要する患者にも迅速に対応

救命救急センターで受け入れた救急患者さんを迅速に診断し、その後スムーズに早期治療へとつなげられるように院内連携や設備が充実。また、各診療科では専門医師による高度医療を提供しています。

先進の機器や設備を拡充し、専門性の高い医療を提供いたします

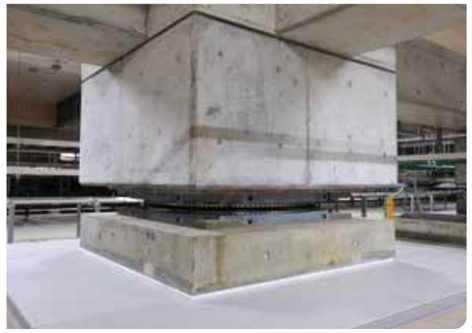
地域の中で多様な高度急性期医療を受けていただけるよう、充実した体制整備を進めてきました。脳梗塞や脳出血、くも膜下出血などの脳血管障害の治療・管理を行う「脳卒中センター」もその一つ。緊急を要する患者さんを迅速に治療につなげられるよう、脳疾患専門の医師が24時間在室。専門的な治療を常時提供する体制を整えています。

また、分娩施設を有し、妊娠期から産後までの周産期の医療を行う「周産期センター」があるのも当院の特徴です。新病院では産婦人科と小児科の連携を強化し、「ＮＩＣＵ」（新生児集中治療室）を24時間体制で支えます。そのほか、整形外科では脊椎疾患や関節リウマチの手術を数多く実施。高齢者に多い大腿骨頸部骨折については、手術後に『知多半島りんくう病院』や地域の医療機関で早期から専門的なリハビリを受けられるように連携して診ています。

災害医療

高台移転で有事への備えを一層強化 災害時に地域の命を守るための医療を

愛知県の「地域中核災害医療センター」である当院の使命は、有事の際にも病院機能を保ち、地域に医療を提供し続けること。高台移転や施設の拡充、専門人材の育成など、災害対策に重きを置いた病院づくりを進めています。



有事の際にも継続した医療提供を行うべく、予想最大震度に耐え得る免震構造を取り入れています

南海トラフ地震や伊勢湾台風のような高波を伴う災害時には、医療救護活動を中心に地域の核となって医療を提供する役目を担う当院。その役割を果たすため、津波による浸水リスクの高い沿岸部から離れ、高台へと移転し、病院の建物も予想最大震度に耐え得る免震構造を取り入れました。災害時には自衛隊が活動拠点を置けるような防災広場を半田市が整備。屋上のヘリポートはドクターヘリも利用可能です。知多横断道路から近いことで、医療物資やスタッフの運搬・移動もしやすい立地といえます。

また災害派遣医療チームＤＭＡＴを3隊持つなど、知多半島の災害対策の要を担うべく、長年体制を築いてきました。能登半島地震の被災地にも迅速に駆けつけるなどわれわれの仕事が全国の役に立っていることを実感するとともに、こうした経験を地域に還元していきたいと考えています。いざというときに地域に貢献するため、今後も定期的な訓練を続けていきます。

その他　施設紹介

患者さんが少しでも解放感を感じられるよう、屋外にリハビリ庭園を造りました。ここではスロープや階段を使った歩行訓練を行います

受診時の負担を少しでも減らすため、知多半島総合医療センターの外来はすべて1階に集約しました

陣痛室、分娩室、回復室が一体となった部屋（LDR室）です。移動することなく同じ部屋で過ごすことができるため、産婦さんへの負担を軽減することが可能です

産科病棟の個室です。服や手荷物を収納するロッカーと手洗い、専用トイレを設置しています（産科病棟についてはシャワー室も設置しています）

知多半島りんくう病院

院長メッセージ

急性期から在宅復帰支援まで中核病院として地域医療の一翼を担う

新たに名称変更を行い、より良い医療で地域を支える『知多半島りんくう病院』（旧・常滑市民病院）。平日日中の外来中心の急性期からリハビリ、在宅復帰支援まで、地域で暮らし続けるための医療を担います。

知多半島りんくう病院
野﨑 裕広院長

1988年名古屋大学医学部卒業。同大学大学院医学系研究科呼吸器内科研究生、ミシガン大学研究員、社会保険中京病院（現・中京病院）呼吸器内科部長、内科部長、総合診療科部長などを経て2018年常滑市民病院副院長、2023年には同院院長に就任。2025年4月より現職。

日常診療から在宅復帰支援まで、地域住民の医療を支えていきます

『知多半島総合医療センター』と経営統合しましたが、平日日中の急性期医療といった日常診療の提供はこれまでと同じです。夜間・休日の救急や、がん治療の一部など同センターに集約される機能もありますが、連携して診る体制ですので、地域の方々にはこれまでと同様に安心して受診していただきたいですね。

また、急性期を過ぎた方が在宅に戻るための医療については当院が地域の中心になって行います。急性期治療を提供しつつ入院患者さんの在宅復帰支援も担う場合、マンパワー不足が懸念点でしたが、経営統合で人員異動がしやすくなったことは大きなメリットでしょう。より良い医療ができる体制になったと感じます。これまで院内外と連携しやすく、地域のニーズに柔軟に対応できる中規模病院であることが当院の特徴でした。そうした強みはそのままに、日常診療から退院支援までを診る「ケアミックス型病院」としてより優れた病院をめざしていきます。

外来機能

日中の救急外来をはじめ幅広い診療科で地域の日常診療を担う

地域を支える二次救急医療機関として、従来と変わらず地域の医院・クリニックからの紹介を受け入れていきます。また『知多半島総合医療センター』との連携を深めることで、より地域に信頼される医療の提供を実現していきます。

地域のクリニックなどとの連携のもと、各診療科での外来診療も継続して行い、日常的な急性期医療を提供します

経営統合後も外来診療体制に大きな変化はなく、受診の方法は今までと変わりませんので、かかりつけ医からの紹介状を持参の上ご受診ください。より専門的な治療が必要な場合は『知多半島総合医療センター』と連携し、継続した診療を提供します。救急医療においても、同センターと連携を深め、継続した対応を行っていきます。当院では、平日日中の初期救急医療を担い、必要に応じて適切な入院治療につなげていきます。一方で、夜間や休日などの時間外の救急車受け入れのほか、脳卒中や心筋梗塞のように緊急対応が必要な場合は、知多半島総合医療センターで診る体制です。

両院では患者さんの医療情報を電子カルテ上で共有する仕組みがあります。当院から知多半島総合医療センターへの入院時、あるいは退院後に当院で引き継いで診る際には電子カルテを介して治療内容をスムーズに共有し、切れ目のない医療の提供に役立てています。

在宅復帰に向けた入院機能

多職種のチームで院内・院外と連携専門的なリハビリにより在宅復帰を支援

入院前から、入院中・退院後の生活についての不安を軽減し、より安心して健やかに過ごしていただけるよう、充実したサポート体制があることが特徴です。患者さんが地域で暮らし続けていくための医療を推進しています。

患者さんの病態や要望に応じて、専任スタッフがチームでさまざまなリハビリを提供します

当院には、急性期を過ぎた患者さんのリハビリを支援する「回復期リハビリテーション病棟」や、入院中に在宅復帰に向けた医療を提供する「地域包括ケア病棟」があります。こうした病棟での入院を通じ、知多半島における在宅医療ニーズに応えています。

例えば、リハビリを担う部門では、365日リハビリを行うために専門の医師や看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といったチームが密に情報を共有。『知多半島総合医療センター』で手術を終えた患者さんも受け入れ、在宅生活に戻るための専門的なリハビリを提供します。

また、入院患者さんがスムーズに在宅復帰できるよう、入退院の支援、地域医療機関との連携といった業務を担う「患者サポートセンター」も設置。医療ソーシャルワーカーをはじめとした多職種の専門家が、患者さんとそのご家族が抱えるさまざまな心配事について相談に乗り、課題を解決するための調整や援助を行っています。

感染症

全国4病院のうちの一つとして特定感染症指定医療機関の役割を担う

当院は平成27年に現在の場所に移転。中部国際空港（セントレア）に近接したこともあり、国内4番目の「特定感染症指定医療機関」となりました。コロナ禍では迅速に専用病棟を設置するなど先進的な取り組みを行っています。

特定感染症病床では、未知の感染ウイルスが病室外に漏れ出ないための対策を施しています

感染症指定医療機関とは、「感染症法等に基づき、感染症患者さんに対し早期に良質かつ適切な医療を提供し、その重症化を防ぐことを担当する医療機関」を指します。その中でも、特定感染症指定医療機関は現在、全国に4病院あり、その一つが当院です。平成28年1月に、厚生労働大臣より国内4番目の病院として指定を受けました。中部国際空港に近接する医療機関として、未知の感染症のまん延を水際で防ぐ重要な役割を担っています。

新感染症の所見がある患者さんや、一類感染症、二類感染症、新型インフルエンザなどの感染症の患者さんの入院を担当する役目を果たすため、感染源を病室外に漏らさないよう施設を整備。感染教育をはじめ、空港の検疫所などとともに感染症に対応するための訓練も定期的に実施しています。

また、入院患者さんが薬の効かない耐性菌に感染することを防ぐために、抗生物質の適正使用などにも多職種で取り組んでいます。

透析

多職種のチームによる透析医療 透析と同時に急性期疾患の治療も可能

血液浄化部門を設けるなど、透析医療に注力していることは当院の特徴の一つです。腎臓内科の医師や看護師、臨床工学技士、管理栄養士、リハビリスタッフといった多職種がチーム医療で患者さんのために取り組んでいます。

幅広い診療科・多職種が連携して急性期疾患の患者さんの透析治療も行うなど、総合病院ならではの透析医療を提供します

当院では質の高い透析治療に取り組んできました。腎疾患に伴う貧血、電解質代謝・骨の異常、水分量や体重の管理はもちろんのこと、合併症対策にも注力しており、心臓、末梢血管、脳血管の異常の早期発見・早期治療に取り組みます。

加えて、専用機器で病気の原因物質を血液中から取り除くアフェレーシス療法にも対応いたします。下肢末梢動脈疾患に対してはこの療法を応用するだけでなく、手術や血管内治療、フットケアを組み合わせた総合的な治療を提供いたします。基幹病院の強みを生かして、透析を継続しながら他科と連携して他の疾患の治療ができるのも、大きな特徴です。当院では透析療法だけでなく、薬物療法、運動療法、食事療法などの多様な方法で、多職種チームがサポートいたします。

また、慢性腎臓病への理解を促進するため、健康教室も実施しています。食事療法を実践する昼食会も行っておりますので、ぜひご参加ください。

婦人科

内視鏡手術と不妊治療で地域における先進医療を担う

令和4年より婦人科をさらに強化。体の負担を減らすための先進的な手術や高度生殖医療などを行うとともに、病院本館と入り口を分けた別棟で女性医師を増員するなど、受診のしやすさにもこだわっています。

婦人科では、本館と入り口を分けた別棟を設けており、来院しやすい環境を整えました

当院の婦人科は、本館とは入り口を分けた別棟で、外来診療はもちろんのこと、日帰り手術や高度生殖医療にも力を入れています。「1㎜でも傷を小さくし、体に負担がかからない治療」をモットーに、子宮筋腫や卵巣嚢腫などの良性疾患から婦人科がんに至るまで、幅広い疾患において内視鏡による侵襲の少ない手術が可能です。また、子宮筋腫、卵管狭窄などが影響する不妊症においては、腹腔鏡手術や卵管鏡による開通術にも対応します。その上で、体外受精、顕微授精、胚移植法といった高度生殖医療へとハイブリッドな連携ができるため、スムーズに妊娠のフェーズへ移行できます。

患者さんの症状に応じて負担を考えながら、ワンストップでより良い先進の治療を提供できるのが当診療科の強みです。それを支えるために他科と連携するだけでなく、胚の培養士をはじめとする専門性の高いスタッフが在籍しており、チームで患者さんの治療をサポートいたします。

その他　施設紹介

敷地内には散歩道や屋上庭園を設置し、入院中でも自然が感じられるリハビリ環境です

車椅子をご利用の方でも余裕を持ってご利用いただける広々としたエントランスホール

婦人科棟は病院本館とは別で入り口を設けています

各ブロック受付が視認しやすい外来エリア

地域の皆さんか らの気になる声にお答えします！ Q&A

Q 旧・常滑市民病院で行っていた外来機能は、知多半島りんくう病院でも継続されるのでしょうか?

A 平日日中の外来診療や救急外来診療は、これまでと同様に実施していきます。特に健康診断で要検査と診断された患者さんが受診できる急性期医療の提供は地域にとって重要だと考えており、今後も体制を継続していきますので、安心して受診してください。※健康管理センターは2026年度に廃止予定です。(知多半島りんくう病院 野﨑院長)

Q 自家用車がないのですが、知多半島総合医療センターまでのバスやタクシーなどのアクセス面は強化されますか?

A 知多半田駅から知多半島総合医療センターへ、1時間に2本程度、路線バスが走ります。半田市民には、市の補助による医療センター直行タクシーを運行します。病院間の移動については、2025年度にシャトルバスの試験運行を開始します。(知多半島総合医療機構 渡邉理事長)

Q 知多半島りんくう病院は回復期や地域包括ケアがメインとなると聞いていますが、今後手術は行わないのでしょうか?

A 知多半島りんくう病院では、回復期リハビリ医療や地域包括ケアに注力しつつ、それ以外の診療も継続して実施していきます。婦人科などの手術も、引き続き実施していきますが、重症度が高い場合やがん治療など高度な医療が必要となる場合は、知多半島総合医療センターで手術を行うことがあります。(知多半島りんくう病院 野﨑院長)

Q 救急の外来の中心は知多半島総合医療センターが担うそうですが、知多半島りんくう病院では診てもらえなくなるのでしょうか?

A 夜間・休日にはすべて知多半島総合医療センターにお越しいただくことになりますが、平日日中に自家用車やタクシー、徒歩でお越しいただける場合は、知多半島りんくう病院でも救急外来で診察をいたします。なお、救急車での搬送については、原則として知多半島総合医療センターで受け入れます。(知多半島りんくう病院 野﨑院長)

Q 将来的に南海トラフ地震が心配されますが、災害拠点病院として、知多半島総合医療センターの耐震性が気になります。

A 新病院は平時のみならず、南海トラフ巨大地震が発災した場合でも継続して医療を提供できることを命題として設計を進めてまいりました。災害拠点病院としての機能を維持するために、巨大地震を見据えた免震構造を新たに開発し、採用しております。建物は地震発災後も継続して使用することが可能です。(知多半島総合医療機構 渡邉理事長)

Q 経営統合により両院の連携がさらに強化されると思いますが、患者にどのようなメリットがもたらされるのか具体的に知りたいです。

A 救急医療やがん診療などの高度医療、夜間救急や急性期は知多半島総合医療センター、初期救急医療や回復期は知多半島りんくう病院というように機能を分担、効率良く手厚い医療を提供できます。また、カルテの共有により、両院で相互に閲覧が可能になり、より利用しやすい体制になると思います。(知多半島総合医療機構 渡邉理事長)

Q 移転により、知多半島総合医療センターの急性期機能が特化されるそうですが、旧・半田病院で行われていた診療科は継続されるのでしょうか?

A これまで行っていた診療は継続していきますので、旧・半田病院を受診している患者さんは安心していただきたいと思います。もちろん知多半島総合医療センターは急性期病院ですので、当院での役割が終われば必要に応じてクリニックなどへ逆紹介を行い、地域での診療を継続して行えるよう連携していきます。(知多半島総合医療機構 渡邉理事長)

Q 移転により自宅から病院が遠くなるのですが、救急搬送に影響はないのでしょうか?

A 場所によっては搬送距離や時間が長くなるため、道路整備や知多横断道路に救急車両専用出口を設置するなど、救急搬送への影響を小さくし、搬送時間の短縮を図っています。また、消防からの要請に応じ、医師や看護師が救急現場に出動するドクターカーを配備しており、一刻も早く必要な医療処置を行う体制を整備しています。(知多半島総合医療機構 渡邉理事長)

訪問看護ステーション

在宅療養の利用者さんときずなを紡ぎ赤い糸でつながる看護を

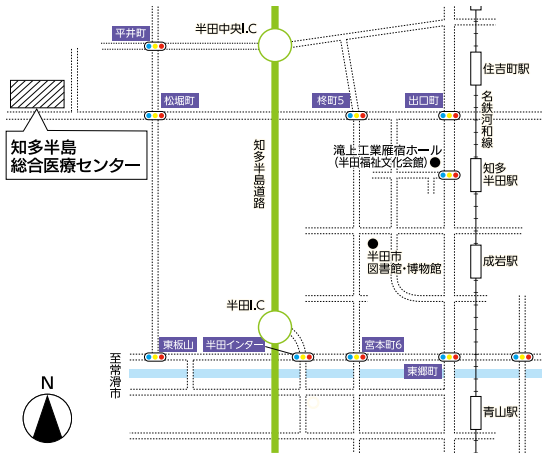
訪問看護とは、主治医が「訪問看護サービスの利用が必要」と認めた方を対象としたサービスです。主治医の指示に合わせ、看護師や理学療法士といった専門家がご自宅に訪問し、在宅医療を続けるためのお世話や診療の補助を行います。

利用対象となるのは病気やけがなどにより在宅療養をしている状態にあり、かつ、かかりつけの医師が訪問看護の必要を認めた方です。病院を退院された後も、栄養剤の点滴が必要など自宅での医療管理が必要なとき、もしくは自宅での療養生活におけるアドバイスが欲しいときにご利用いただけます。「看護にてきずなを紡ぐ赤い糸」を合言葉に、利用者さんとのきずなを築けるようなサービスに努めていますので、利用を希望される場合はまず担当のケアマネジャーにご相談ください。

いつまでも地域で暮らし続けるために多角的な面からサポート

私たちのサービスは多岐にわたります。例えば、血圧・体温・脈拍などのチェック、病状の観察、精神面のケアといった「健康状態の管理」。また、「治療促進のための看護」として、医療機器や器具の管理、服薬指導、主治医の指示による処置や検査にも対応します。関節の硬化を防ぐ運動や歩行・排せつなどの動作訓練といった「自宅でのリハビリ」も行うほか、痛みの緩和、精神的な支援、看取りに関する相談など「終末期の看護」も重要な役割といえるでしょう。ほかにも住宅改修や福祉用具導入、介護の負担など日常生活での相談にも応じ、多角的な面から利用者さんとご家族をサポートします。

知多半島総合医療センター



T E L	0569-89-0515
所在地	〒475-8599 愛知県半田市横山町192番地
駐車場	有（約450台）
休診日	土／日／祝、12/29～1/3（救命救急センターを除く）

アクセス	
車	知多半島道路半田中央ICから約5分、半田ICから約8分
電　車	JR武豊線「半田駅」から車で約20分 名鉄河和線「知多半田駅」から車で約20分
バ　ス	名鉄河和線「知多半田駅」より路線バスで約20分 ※運行ダイヤ等については半田市都市計画課HPをご確認ください。
タクシー	半田市にて自宅からの直行タクシー便を運行 ※片道1000円で半田市が運営するサービスです。詳しくは半田市都市計画課HPをご確認ください。 ※ご利用は半田市民に限ります。

知多半島りんくう病院

T E L	0569-35-3170
所在地	〒479-8510 常滑市飛香台3丁目3番地の3
駐車場	有（立体駐車場約150台）
休診日	土／日／祝、12/29～1/3 （救急外来は平日日中のみ受付）

アクセス	
車	知多横断道路（セントレアライン） 常滑ICから約2分
電　車	名鉄常滑線「常滑駅」から 徒歩で約30分
バ　ス	名鉄常滑線「常滑駅」停留所から 「常滑市役所・常滑市民病院」停留所まで約10分

その他のアクセス方法

2つの病院を結ぶ病院間シャトルバスを運行

※常滑市が運用するサービスです。詳しくは常滑市HPをご確認ください。